戦姫絶唱シンフォギアパンドラ　―In the midst of disaster―

ナメクジ次郎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私立リディアン音楽院……に近い共学の高校に通う少女、大槻重音（おおつきかさね）は、父から貰ったお守り、パンドラの箱の装者になり、陰謀に巻き込まれていくお話。

目　次

背中合わせの不幸 ―― 1
特異災害対策機動部二課にて ―― 5
わたしに今、できること ―― 12
戦う事、守る事 ―― 19
手合わせ ―― 26

背中合わせの不幸

「ようし、ならお父さんがずっと大事にしてきたお守り、これを重音に半分あげよう、これで私が居なくなっても寂しくないだろう？」
「うん……」
本当は、行ってほしくなかった。
父がなんの仕事をしているのか、その時幼いながらもうっすらとはわかっていた。
弱者の為だと、正義の味方だと言っていたけど、上手くいっていないのは知っている、ノイズの被害者が出たというニュースを見る度に静かに涙を流しているのを私は見ていた。
きっと父は救えない自分を責め、さらに危険な場所に赴くのだろうと、なんとなくは理解してるのだ。
そして止めてはいけないことも。
「っとと、ちょっと偏っちゃったかな……よし、これをこうして、はい」
私の気持ちもいざ知らず、肌身離さず持っていたお守りを、私用のネックレスに加工して渡してくれた。
「これは海外でお礼に貰ったお守りでね、神様が作ったって言われてるんだ」
「本当に……？」
「本当さ、だからね、もうどうしようもない、どうにもできないって時は、これに祈れば神様が助けてくれるよ」
神様が助けてくれる、まだ子供とはいえ、胡散臭い内容にしか聞こえなかったけど、それを言うのは野暮だろうと、口には出さなかった。
「それじゃあ、いってきます。後の事は弟に任せてあるから」
「いってらっしゃい……」

◆◆◆◆◆◆◆

少しづつ意識が覚醒していく、周囲を見渡すとそこは見慣れた教室、また眠ってしまっていたらしい。

二年前の夢、まだ自立もできない中学生の頃、父は海外へ仕事へ行ったまま、ついぞ帰ってくる事は無かった。
窓の外に目を向けてみれば既に部活に興じる生徒すら居ない。
誰も起こしてやろうとか、思わなかったのだろうか。話すほどの関係の友人なんて居ない訳なんだけども。
「はぁ、帰ろう……」
荷物をまとめ、学校を後にする。
すっかり暗くなってしまった帰り道を歩く、遊ぶにしても帰るにしても微妙な時間だからか周囲に人は居ない。
ふと、坂道の上を見ると巨大な建物が見える、私立リディアン音楽院だ。
帰宅部である私は、ここでリディアン生徒の歌声を聞くのが日課になっている。
歌は好きだ、けれど自分自身はあんなにキラキラと素敵に歌う事なんてできるはずがない、だから聞いてるだけで満足なのだ。
……こんな時間じゃ誰も歌っていないのだけれども。
「こんな事なら昨日、特に理由もなく夜更かしするんじゃなかった……失敗しちゃったなぁ」
毎日毎日勉強するためだけに学校に行って、そして帰る、そんな生活の活力が今日は無い、それだけで思っていた以上に落ち込んでいる自分が居た。
だからだろうか、舞っていたそれに気づくのが遅れてしまったのだ。
風と共に運ばれた、灰に。
「それ」に気づいた時には既に遅かった、俯いていた顔を少し上げると、視線の先にはもう居たのだから。
「ノイ……ズ？」
独特な足音を立てながらノイズがこちらに近づいてくる。
触れた人間を炭化させ殺してしまう、人類だけを殺す存在。
逃げなければ、そう思うのに足は恐怖で動かない、それどころか腰が抜けて、もはや立っているのもやっとだ。

「た……たす……助けて」
震えた声しか出ない、いや、この声が届いたとしても誰が助けてくれるというのだ、人類にノイズに対抗する手段など無いのだから。
「嫌……嫌！　嫌！　嫌！　いや！　助けてよ！」
でも、いくら諦めようとも恐怖が無くなるわけではない、こちらを囲むように近づいてくるノイズに対して、半狂乱になって私は叫んだ。
「助けて……お父さん……」
もう思い出の中にしか存在しない父に対し縋るような言葉しか出ない自分が嫌になる、でも、あの日父が言っていた言葉を、思い出す。
「もうどうしようもない、どうにもできないって時は、これに祈れば神様が助けてくれるよ」
あの時の言葉を信じた訳じゃない、ただここで死ぬのが嫌だっただけで。
でも少し、ほんの少しだけ、父が守ってくれるかもしれないと、思ってしまったのだ。
素材もわからないし、見た目も不格好で武骨な、硬い何かに紐を通しただけのお守りを両手で握り目を閉じる。
その時、メロディと詩が、胸の中に浮かんだ気がした。
きっとこれは祈りの言葉なんだろうと、直観がそう知らせていた、だから。
私はそのフレーズを、声に出した。
「ｒｏｌｅ　ｐａｎｄｏｒａ　ｐｙｘｉｓ　ｔｒｏｎ」
その歌を口にした瞬間、私の体は強い光に包み込まれる。
そして収束した光は粒子となり、私の体にまとわりつく。
白を基調としながらも、それを上から塗りつぶすような深紫色の装飾が施された機械のようなスーツが形成された。
「……へっ？」
何が起こったのかわからず、情けの無い声が出てしまった。
先ほどまで着ていた地味な制服はどこへやら、気づけばまるで変身ヒーローのような衣装になっているのだ、驚かないはずがない。

そしてさらに、胸の奥から、この身に纏う名も知らぬ衣装から、メロディが聞こえ、詩が浮かんでくる。
歌えというのか、この私に。
でも今は、それしかないんだよね……？
なら、そうするしかない。覚悟を決めて、その歌を紡ぎ始めた。

特異災害対策機動部二課にて

胸に浮かんだ歌を歌いながら、じりじりと後方に下がる、冷静になってみると姿が変わったからと言ってなんになるのだろう。
人類の脅威が今目の前に居る事実は変わらない、つまり触れられたら死んでしまうのでは？　そう判断したからだ。
近づいてくるノイズが一瞬立ち止まる、これは……本当に神様が助けてくれたのだろうか。どうせならこのまま逃げられるまで止まっていてくれると嬉しい。
しかしそんな私の期待を裏切り、あろうことかノイズはまるで槍のように細長い姿と変わり、すさまじい速度でこちらへ向かってきた。
「ひっ、ひいぃッ！」
飛んできたノイズに怯えて咄嗟に後ろに飛ぶ、するとなんということだろうか、今まで感じたことのないほどのスピードと共に体が動き、そして。
数百メートルは先にあったであろう電柱に背中から激突し勢いが収まる、痛みは……ない。
先ほど自分の居た場所に目を向けると数体のノイズがそこに突き刺さっており、今度はまた別のノイズが私に向かって、既に飛んできていた。
「あっ……ダメ！」
無駄だと思いながらも、目を閉じて身を守ろうとして咄嗟に両手を前に突き出す、死んだかも……。
しかし、何かが激突した感触も無ければ痛みもない、もしかしてノイズに殺されるのはこんな安らかな死に方なのだろうか。
そう思いながら閉じた目を開けると、私の手に触れたノイズが炭化し、消滅していた。
「はは……なにこれ、ほんとに変身ヒーローみたいじゃない……」
今のが偶然じゃないと、なんとなく理解できた、つまり今の自分はノイズと戦える。
弱い人の為、正義の為と言っていた父がどうにもできなかったそれ

と、戦う力がある。
それならば答えは決まっている、今度はしっかりと目を開いて、たくさん居るノイズと対峙する。
……いや、改めてちゃんと見ると、多くない？
「この数は無理！　絶対無理！」
奥から奥からぞろぞろとノイズが迫ってくる、これはもしかしたら逃げの一手を打った方が無難じゃないだろうか。
そう思い踵を返して逃げようとしたところで……。
「そこを動かないで、死ぬわよ！」
と、上空から声が聞こえた。
その指示に従い立ち止まって、声のした方を見る。
……そこには天女が居た。いや、あれは。
「風鳴……翼？」
月の光に照らされて輝く綺麗な青い髪、スレンダーながらも美しい体、そして良く通る声。
日本を代表するトップアーティストだ、私もよく目にするし曲も聴く、見間違えるはずがない。
それでも何故歌手である彼女が、今の私のような変身スーツを着て戦っているのか？
頭に浮かんだそんな疑問の答えが出る前に……。
頭上から無数の剣が降り注ぎ、目の前に集まっていたノイズを一掃していく。
「ひぃっ！」
そのうちの一本が目の前に落ちてきて、情けない声を出して尻もちをついてしまう。
やばい、腰抜けちゃって立てない。
しかも変身が解けてしまったみたいで、光が弾けて元の制服姿に戻ってしまった。
こういうの、特撮で見る時にどうなってるんだろうと思ってたけど、現実でも服はそのままなんだ……。
「……そこのあなた」

「ひゃ、ひゃいっ！」
　見事な着地を決めた風鳴翼が、私に声をかける。
「あなたは、何者？　何故シンフォギアを纏っていたの」
「わ、私は大槻重音十五歳……この辺りの高校に通ってて……趣味は、じゃなくて、シンフォ……ギア？」
　シンフォギア、聞いたこともない名前だ。
　多分、私がさっき纏っていた変身スーツみたいなのがそれなんだと思うけど、なんかカッコイイ名前だ。
　やっぱり日曜朝に見てる番組みたいな……。
「何も知らないでそれを纏っていたというの？　まさか、そんなはずが」
「そ、それが……ノイズに襲われた時にお父さんから貰ったお守りに祈ったら歌が浮かんできて、その通りに歌ったらこんな姿になりまして……」
「叔父様も、櫻井女史さえも知らない聖遺物。それがどうしてシンフォギアという形で……」
「え、ええと、翼さん？　私、折角助かったんですから、家に帰りたいんですけど……」
　何やら考え事をしている様子で独り言を喋っているみたいだけど、この隙に逃げる、なんていう事はできそうにない。
　それはもう、威圧感が凄い、明らかに歴戦のそれだ、いや私はそういうの全然わからないんだけども、何故かそう思えた。
「あなたを、このまま帰すわけにはいかなくなりました」
「で、ですよねー」
「特異災害対策機動部二課まで、同行願います」
「に、二課……？　ってあれ!?　いつの間にか私、黒服の人達に囲まれてませんか！　同行っていうか強制連行ですよね！」
　気づいたら周囲を制服を着た屈強な人たちに四方八方を囲まれ、逃げ道が無くなってしまっている。
「突然ですみません、あなたの身柄を、拘束させていただきます」
「えっ……」

その声に何か反応を返す間もなく、腕への重み、そして視界が遮られる。
これってもしかして、拘束具……？
さっきの優しそうな声の人がつけたんだろうけど、早業過ぎませんか!?
「どうしてこうなるの!?」
誘導されるがままに車に乗せられ、走り出したようだ。
私このままどうなっちゃうの!?

◆◆◆◆◆◆◆

しばらく車に揺られて、その後少し歩いて、長い事エレベーターに乗せられて、そうしてたどり着いた、よくわからない場所。
地下の施設という事はわかるんだけど、それしかわからない。
ずっとされていた目隠しを取られてから感じた眩しさに目を細めていると突然。
パンッ！という音と火薬の匂い、もしかしてハメられた!?　同行というのは嘘で秘密を知った私を処理する為にここへ！
というところまで想像した辺りで痛みを感じない事に気づく、そしてようやく慣れて良く見えるようになった風景は。
赤いライオンと美女……そう形容してしまうような二人と、黒服の皆さんが居た。
「ようこそ！　人類守護の砦、特異災害対策機動部二課へ！」
「えぇ……」
目隠しまでされた意味はなんだったんだろうか……というか、秘密の組織にしてはノリが軽くありませんか二課。
「もう、弦十郎さん。この子引いちゃってるわよ？　響ちゃんみたいな子にはいいけど、相手を選ばなきゃ……きっとシリアスなやつ、期待してたんじゃない？」
「まあ、その、はい……秘密を知ったから排除ーとか、私の持ってるコレを解析するために人体実験ーとか、思ってました……」

「人体実験の方は……あなたの態度次第じゃ、ほんとにやっちゃうかもしれないけれど」
「やっぱりするんですか!?」
「了子くん、あまり脅すようなことは止してくれ」
「は～い」
　人体実験、本当にされてしまう可能性があるなんて……改造人間まっしぐらじゃないですか。
「君にここへ来てもらったのは他でもない、協力を要請したいことがあるからだ」
「協力……ですか、こう、やっぱりさっきの変身みたいなのが、ノイズに対する対抗手段で……みたいなやつですか？」
「その通りだ、やけに物分かりがいいな……」
「こういうの、ドラマとかじゃ定番ですから……」
「そ・れ・と、あなたの持ってるその聖遺物。私たち日本政府が把握できていない未知の存在なの。だからその解析も、ね？」
「聖遺物……？　このお守りが……？」
「ああ、すまない、そこの説明もしなければいけないな」
　……その後、二人から様々な説明を受けた。
　まず一つが聖遺物、それは古くからの伝承に語られた伝説の武器、道具、そんなものが現代に残ったものらしい。
　そしてシンフォギア、特定振幅の波動、つまるところの歌により、失われた聖遺物の力を引き出して身に纏うもので、美女の方の人、櫻井了子さんが開発したらしい。
　お父さんが残したお守りは、ギリシャ神話に登場するパンドラの箱であるという事が、私の胸に浮かんだその歌で判明した。災害復興支援で行った先で貰ったと聞いていたけど、それが本物だったということらしい。
「大体の話はわかりました……それで協力というのは、あの力を使ってノイズと戦う事ですか？」
「それもあるが、まずは君の持つ聖遺物の解析からだ。今は君の私物だが、こうなってしまった以上は日本政府へ所有権を譲渡してもらわ

なけりゃならない」
所有権の譲渡……これが、私の物じゃなくなるのか。
糸が通されたそれを、両手で握る。しばしのお別れか……。
「君のお父さんの形見という事は聞いたが、これは俺の一存だけで決められることじゃない、だから……」
「いいですよ、お渡しします」
「本当にいいのか？」
「いいんです、お父さんならきっと、ノイズに苦しめられてる人を助ける為なら、そうしなさいって言うと思いますし、それに……お父さんが、ノイズ相手に無力じゃなかったって言えるなら、私も嬉しいです」
私の記憶にある父は、優しくて、大きくて、だからいつもノイズの被害に心を痛めていた。
だから……これでよかったよね？
「そうか、なら俺たちも、悪いようにする訳にはいかないな！」
心強い笑みを浮かべながら……ライオンの方の人、弦十郎さんがそう言った。
「それじゃ、お話も纏まったところで……重音ちゃんに、脱いでもらいましょっか」
「……ふぇ？」
その後、めちゃくちゃ脱がされて体の色んなところをチェックされてしまった。
シンフォギアを使ったことによる体調の変化、後遺症の有無などを診る為らしいけど、急すぎるし、普通に恥ずかしかった……。
そうして一通り検査が終わった後にまた目隠しをされて家に連れて帰られたけど、その時、誰かとすれ違った気がした。
でも、もういいや……疲れたし早く寝よう。

◆◆◆◆◆◆◆

特異災害対策機動部二課の聖遺物研究施設、そこに櫻井了子と風鳴弦十郎の二人が、神妙な面持ちで立っていた。

「了子くん、彼女の持っていた聖遺物の事だが、何かわかったことは」
「そうね……あの子の言っていた通り、パンドラの箱で間違いないでしょうし、身辺や家系を調査してもそれらしきものに当たらないみたいだから、本当に偶然入手したものみたい」
「そうか……それにしても、まさか了子くんの手を加えずともシンフォギアとして纏える聖遺物とは……」
「あら、それに関しては既に仮説が立っているわよ？」
「本当か！」
「ええ……パンドラの箱は伝承ではいくつもの厄災と一つの希望が入った箱。残念ながらこれにはもう何も入っていないみたいだけれど、その性質は残っているわ」
「つまり……聖遺物が彼女を中にしまい込んだ、という訳か」
「そういう事になるわね、あくまで仮説の域を出ていないけど、いい線行ってると思わない？」
「しかしそれでは……まるで彼女が」
「厄災のようじゃないか、って言いたいんでしょう？　多分彼女じゃなくても、適合する人間なら誰だって、このまま纏えると思うわよ？」
一呼吸置き、彼女はこう続ける。
「響ちゃんにも言ったけど、人類は呪われているもの。あの箱に入る条件は満たしているはずよ」
「了子くん……」
「まっ、それでも不安要素の塊だし、政府からの要請もあるだろうから、シンフォギアの形に加工はしちゃうけど」
「そうだな……重音くんには事後承諾になってしまうが……」
「所有権を譲渡したのは彼女ですもの、納得してくれるわよ」
そうして、二課の夜は更けていく。

わたしに今、できること

特異災害対策機動部二課へ連行された次の日、放課後すぐに帰宅して待っていると、昨日と同じ黒塗りの車と黒服の皆さんが来て、二課の本部まで送迎してくれることとなりました。

なったの、ですが……。

「こっ、ここここ……ここここ、ここっって」

「どうかされましたか？」

昨日は目隠しをされていたから気づかなかった、いや、気づけなかったので、今改めてそれがどこにあるのかを認識して、鶏みたいなリアクションを取っている私に、黒服の人のうちの一人……緒川さんが不思議そうに声をかけてくる。

どうかされましたか？　って、ここは。

「二課ってリディアンにあったんですか!?」

「そういえば先日は目隠しをしていたので、重音さんは知りませんでしたね。リディアン音楽院高等部地下に隠されているんですよ」

「という事はまさか、リディアンは政府の実験場!?」

「あまりいい言い方ではありませんが、そういう側面はありますね」

知らなかった、いや、政府の秘密組織なんだから知らない方が当たり前なんだけど、ずっと眺めていた学校にまさかそんなものがあるとは。

「あ、だから一回着替えて来る必要があったんですね？」

「はい、他校の生徒がリディアンに居ると噂になってしまいますし」

危ない、今日は検査をすると言われたから、学校指定のジャージを持参するところだった。

まさかの真実から気をそらすため、車外の音に耳を澄ます。

歌が……聞こえた。

「好きなんですね」

「ふぇ……えっ、何がですか？」

「歌、ですよ。二課であなたの事を調べたら、リディアン周辺での目撃情報が多かったので。今もここの生徒の歌、聴いていたんじゃないで

すか？」
「は、はい……休日はよく音が漏れてる場所とか探したりして、ここの人達の歌を聴くんです。なんというかキラキラしてて、希望で溢れてて、元気が貰える気がして」
歌で人を幸せにする。それはきっと凡人にはできない事だ。
少なくとも、私にはそんな事、どうやったって……。
「着きましたよ。二課まで案内しますからついてきてください」
「あっ、は、はい！」
わたわたと緒川さんについていく、ああ、私、憧れのリディアンでなんて無様なサマを晒しているんだろう、そう思った。
そしてその後乗ったエレベーターで、追加の無様を晒したのは言うまでもない、視覚があるかないかであそこまで体感で感じるスピードが違うなんて聞いてませんよ……。

◆◆◆◆◆◆◆

翼さんが重症を負い、入院した。
検査を終えて二課で待機していた私に聞かされたその情報は、あまりに衝撃的で、しばらく頭が働かなかった。
皆沈痛な面持ちで内通者の可能性、もう一人のシンフォギア装者である響さんが狙われていた事、そして響さん自身の思い、様々な事を話している。
そんな中、私ができること、言えることは何もなかった。
そもそも、彼女とは今日初めて会ったのだから仕方ないと言えばそうなのだが。それでも何も言えない事が歯がゆかった。
だからだろうか、響さんが帰った後にその言葉が出たのは。
「私は……」
「どうした、重音くん」
「私は、まだ戦えないんでしょうか。ノイズとも、その鎧の少女とも、内通者とも……」
「……パンドラの箱の加工はまだ終了していない、それに」

「それに……？」
「力を振るうだけが戦う事じゃない、君は二課の所属になったとはいえ戦う事のできない一般人と同じだ。だから今は君ができる事をするんだ」
「私に、できること……」
そんなもの、あるのだろうか？
私にできる事なんてほんの少ししかない、それにここに集まってるのはその道のプロフェッショナル達だし。
「それに、あと数日もすれば了子くんが加工を終わらせてくれる。そうすれば響くんと並び立つ事もできるし、ノイズに怯える市民を守る事もできる！」
「武具って形の聖遺物じゃないからちょ～っと時間がかかってるけど、この天才、櫻井了子にかかればバッチリ仕上げてあげられるわよ」
「だから重音くん、君は安心して時を待つんだ」
「わかり……ました」
ああ、力になりたいなんて言ったのに逆に励まされて、大人にはやっぱり敵わないな。
家に帰ってみても、お風呂に入ってみても、自分に何ができるかなんて思いつきもしなかった。
ノイズに対して無力であっても、誰かの為に何をできるか考えて実行に移していたお父さんがどれだけ凄い事をしていたのかがよくわかる。
いけない、このままじゃドツボにハマってしまう。いや、既にハマっている。
今の自分に何があるのか、それを考えていた時に、ふと近所のお好み焼き屋さんの言葉が脳裏をよぎった。
『お腹空いたまま考え込むとね、嫌な答えばかり浮かんでくるもんだよ』
ああ、そうか、なんだ簡単な事じゃないか。
響さん、思いつめた様子だった。それにみんなも、だったら私に今できることはそれしかないじゃないか。

そう決意して冷蔵庫と調味料を確認した後、私は二十四時間営業のスーパーまで走った。
これが私に今できる戦いだというのなら、それをするしかない。その思いを胸に抱いて。

◆◆◆◆◆◆◆

「ええっ!?　響さん来てないんですか!?」
夜のうちに仕込みを終え、朝のうちに作れるものは作って、痛みやすいものは黒服さんが迎えに来るまでの間に仕上げ。
持てる料理スキルを最大限使って作ったお弁当が入った重箱を持って二課までやって来たのに、無駄足になってしまった。というかこれ私一人じゃ絶対食べきれないし。
「まあ昨日の事もあるし、もしかしたらもう寮に帰ってるかも。何か渡したいものがあるんなら預かっておくけど」
そう言いつつ椅子をこちらの方に向けたのはよくこの部屋でモニターと格闘してる人……藤堂朔也さんだ。
「そうしてくれるとありがたいですけど、できれば自分で渡したいかなーなんて……」
「司令に連絡してみれば、もしかしたら居場所を知ってるかもしれないわよ」
「そうしてみます!」
そう助け船を出してくれたのは、同じくこの部屋でよくモニターと格闘している女性、友里あおいさん。
この間渡された弦十郎さんの携帯の番号を入力し、しばらく待つ。
一度、二度、三度目のコールで出てくれた。
「あっ、弦十郎さん、聞きたい事があるんですが」
「重音くんか、今日は検査は無かったはずだが……」
「響さんがどこに居るか知りませんか？　私、自分にできること、わかったんです」
「そうか……響くんなら俺の家で特訓中だ、用事があるのならば来る

といい」
「はい！」
なんだ、響さんも吹っ切れたのか。
それなら私がこれを用意しなくてもよかったかもしれない、そう思いつつも。
やっぱり誰かの為に作ったものなら自分で食べるよりも、誰かが食べてくれた方がいいと、作った者としての心理はあるわけで。
「二人ともありがとうございます、私行ってきますね」
あおいさんと藤堯さんに一言お礼を言って私は走り出した。
「はっ……はっ……」
走る、走る。リディアンを抜けて、坂を下りて、住宅街に入りまだ走る。
弦十郎さんの家はリディアンからそう遠くないとはいえ走っていくには距離があるうえに、重箱があまり揺れないようにバランスを取りつつ走っているので体力はどんどん消費されていく。
そして何よりも。
「入口がわからない……壁ばっかりで……どこまでいけばいいの……」
偉い人の家特有の長い壁が私の前に立ちはだかっている。
これだけ長いなら入口をいくつも付けて欲しいなんてくだらないことを考えながら走っていると、やっと門が見えてきた。
「弦十郎さーん！」
息も絶え絶えになりながらも、大声で家主を呼ぶ。
しばらく待っているとどこかで見たことある衣装を着た弦十郎さんが出てきた。
このコスチューム確か中国映画の……。
「お弁当……持って……来ました……」
待ってる間に息は整っていなかったので、荒くなった息を吐きつつそう伝える。
正直あの衣装とか気にならなくなってきた。
「弁当……そうか、重音くんはそれを自分の戦いだと決めたんだな。

ちょうど昼時だ、幸い量もあるようだし、三人で食おう！」

◆◆◆◆◆◆

「いや～、まさか重音ちゃんがお弁当作ってくれるなんて思わなかったよ～」

弦十郎さんと同じ衣装を着た響さんが朗らかに笑いながら言う。

特訓って一体何をしていたのだろうか、というか二人とも形から入るタイプなんですね。

「丁度お腹空いてたし、早く食べよ！」

「まあまあ、お弁当は逃げないですから……」

急かす響さんをたしなめながら、ゆっくりと一段目の蓋を開ける。

ここまで楽しみにされるとやっぱり、焦らしたくなるのが人間だ。

「おお～！」

「ほう、これは見事な」

一段目の中身は綺麗な三角形のおにぎりだ、シンプルに塩で味付けをした真っ白なものと海苔で全体を巻いた真っ黒なもの……こっちの中身は食べてからのお楽しみ。

この時点で二人の二段目への期待は最高潮に達したはず、だからおかずが入っているこちらで、さらに私の料理スキルを見せるとしよう。

そうして二段目を開け放つ。

「……あれ？」

「む……これは」

あれ？　何やら二人のテンションが落ちている気がする。

おかしい、上手くできたし盛り付けだって完璧だったはず。

「重音ちゃん、これは？」

「ささみですよ、低温で調理してあります」

「これは？」

「昆布ですね、濃いめにお醤油で味付けしてあります」

「これは？」

「玉子焼きですよ……？」
「どうして白いの!?」
「体が資本のお仕事だから、たんぱく質は必要だと思って」
「そ、そっか……」
「見事なツートンカラーだな、重音くん。これはこれで一種の芸術かもしれん」
　弦十郎さんが褒めてくれたけど、どうして微妙な顔をしているんだろうか。
　他にも極力雑味が出ないようにしたえのきの煮浸しにひじきの煮物、栄養面も考えて完璧なはずなのに。
「さ、弦十郎さんも響さんも食べてくださいよ。感想も聞きたいですから」
「そうだな、いただくとしよう」
「そうだね！　いただきます！」
　箸を持ち重箱の中身に手を付ける二人、口に合うといいけど。
「美味しい！　美味しいよ重音ちゃん！」
「これは……美味いな」
「ふふん、そうでしょう、昔はお父さんにも作ってましたが好評だったんですよ」
　よかった、二人の口にあってくれたらしい。
「海苔が巻いてある方のおにぎりには……なるほど、佃煮か」
「はい、何時間も弱火でじっくりと山椒の実とちりめんじゃこを弱火で煮て味を濃くしていって……」
「そんなに準備に時間かけてるの!?」
「はい、誰かに食べさせるためだと思うと、そうなってしまって……」
　特訓の合間の楽しい時間は、そうやってゆっくりと、過ぎていきました。

戦う事、守る事

「ったはー！　疲れたー！」
「お疲れ様です。冷たいもの、どうぞ」
「ありがとー！　今日は何？」
「今日は黒豆茶ですよ」
「ま、また黒いんだ……」
　何度目かもわからないやりとり、響さんが特訓をしている間、私も力になろうと司令の家に通ってサポートをしていた。
　それとついでに、あんまりにも体力が無かったから軽い走り込みも……。
「重音くん、すまないがこちらにも貰えないだろうか」
「あっ、はいはーい、すいません気が回らなくて」
「いや、こうして我々のサポートしてくれるだけでも、ありがたい限りだ」
　なんというかこう、部活とかは全然やってこなかったけど、いいなぁ。こういうの。
　放課後に集まって一緒に汗を流す、青春って感じがする。
　まあ一個下の同僚と、筋骨隆々の大人と私だから、そこまで爽やかって感じでもないんだけど、カンフー映画の特訓だし。
「そういえば重音くん、明日の特訓には来なくてもいいぞ」
「えっ……私クビですか!?」
「いや、そういう訳じゃない。明日は響くんが二課にて保管されている聖遺物、デュランダルの護送をしなくてはならなくてな。」
「あっ、なるほど。私まだシンフォギア持ってないですもんね……」
　そう、保管状況や破損具合、それと形状とか諸々の理由で、了子さんがパンドラの箱を加工するのに少し遅れているらしい。
　デキる女を自称してあれだけ自信満々だったのに、あの人もそういう事ってあるんだと思った。
　現状ほぼあの人が独占してる技術らしいから、私が想像つかないほど大変なんだろうけど。ちょっと焦りはある、その為に二課に入った

のに、ずっとお茶とかお弁当作ってるし。
今私にできることをやるにしても、ちょっと物足りない。
「明日そういう事があるなら、響さんにお弁当作りますね！」
「ええっ!?　いいの!?」
「はい、司令！　台所借りますね」
「それは構わないが……」
それを聞いて、私はこのやたら広い家の台所に向かう。
ここ数日特訓に一緒に参加していたから場所は完全に把握してるし、なんなら冷蔵庫の中身も把握……というか私が買ってきた食材も入っている。
響さんはごはんが好きだし、それを中心にするとして。おかずは……。
などと思案しながら歩く私の足取りは、どんどん軽くなっていった。
「いやー、重音ちゃん。初めて会った時が信じられないくらい明るくなりましたね師匠」
「うむ……トレーニングの効果もあると思うが、あれが彼女の元々の性質なのだろう」

◆◆◆◆◆◆◆

それから少し経った。デュランダルの護送は失敗に終わり、再び二課での預かりとなったらしい。
私にできることと言えば結局、シンフォギアがないままだから励ます事や少しでも元気が出るように、栄養のあるものを渡す事だけ。
それもなにかこう、洗った状態のお弁当箱を返しに来た響さんが凄い気まずそうにしてたし、失敗だったかもしれない。
「はぁ……なんか、ちょっとお疲れ気味なのかな」
まだ明るい空の下、帰路につく。
今日は学校の設立記念日だったから午前中に理事長とかの話があって終わり。

それにしてもこういう記念日って普通休みにすると思うんだけど、フィクションとかであるみたいに。
ああいう場はどうも、静かだし何もできないし、嫌な考えばっかり浮かんでくるから苦手だ。特に今日みたいに考え事が多い日は。
「甘いものでも買って気分転換でも……あれ、こんなとこにお店あったっけ」
とぼとぼと歩いていると、何やら見慣れない……大判焼きの店が出ていた。
大判焼き、うん、いい。今日はなんというか餡子の気分だし。
そう思って財布を取り出そうとしたところで、携帯電話の着信が……緒川さんから？
「はい、大槻です」
「重音さん、午後の予定は空いていますか？」
「えっ、はい。今日は午前で学校が終ったので暇になりましたけど……」
「よかった……それなら頼みたいことがあるんですよ」
「頼みたい事、ですか」
「はい、翼さんが本日目を覚ましたので。お見舞いを頼みたくて」
「わ、私でいいんですか？　響さんとか、それに緒川さん自身が行けばいいんじゃ……」
「ボクは今ちょっと手が離せないんですよ、それに響さんにはまた後から行ってもらいますから。すみませんが、お願いできますか」
「え、ええと……はい、行かせていただきます」
「そう気を張らなくてもいいんですよ、翼さんもきっと喜びますから」
「そうだと……嬉しいです」
ずっと入院して意識が戻らない状態だったって聞くし、実は初めて二課に来た時以降会ってないし、少し気まずいような気もするけど。頼まれたのならやっぱり行った方がいいよね。
いやでもやっぱり、トップアーティストの病室に一人で行くなんて絶対緊張しちゃうし。
「……緒川さん」

「はい、なんでしょう」
そういえば、行くんだったら今目の前にあるこれを買っていっていいかもしれない。だとすれば、これは大きな問題が立ちはだかってくる。
だから失敗はないように、これだけは確認しておかないといけない。大事な大事な話だ。
「翼さんはこしあん派でしょうか、つぶあん派でしょうか。それとも、もしかして白とかうぐいすですか!?」
そう、大事なのは。中身だよね。

◆◆◆◆◆◆◆

色々緒川さんから聞いた後、翼さんの分だけじゃなくて二課の皆用の大判焼きを買ってからリディアンのすぐ近く……というよりも併設されている医療施設の中、翼さんの病室があるフロアの休憩室に居た。
いざ引き受けたのはいいけどやっぱり緊張する、いやでもここで緊張してたら病室になんて入れないし……。
意を決して休憩室から出る、確か病室は４０２号室。個室だし他の人に気を使わなくてもいいのが……。
「あっ……」
「大槻……？　どうしたの？　こんなところで」
「あっ、えっ、えと、お見舞いに来ました」
「そう……なら、屋上で話しましょうか」
「は、はい」
松葉杖をして歩く翼さんの後ろについていきながら、屋上へ向かう。
思っていたより元気そうだけど、やっぱり心配だ。
それから数分ほど歩いて、屋上に出た。まだ日も高い位置にあって眩しい。
「えと……翼さん、どうして屋上に？」

「あなたとは初日以外で会う事が無かったし、こうして語り合う事もなかったから。だからあなたの事を、あなた自身から聞きたかった」
「私の事、ですか」
「あなたのシンフォギアがまだ完成していない事も既に報告書を把握しているわ。だけど、そうして待っているうちに状況も変わってきているのはあなたも知っているでしょう？」
「ネフシュタンの鎧を纏った女の子、ですよね」
　完全聖遺物「ネフシュタンの鎧」を纏った、少女の襲撃。翼さんが重傷を負った原因にもなった、ノイズではない私たちと敵対するもの。
「ノイズと戦う覚悟があるのは、あの日あなたから聞いている。けれど、このまま戦いに身を置こうというのなら」
「その少女と……それだけじゃなくて、この一件の裏から手を引いている他国の人とも戦う事になる。かもしれないんですよね」
「そう、そして人間と刃を交えるという事は、修羅の道へ入るという事」
「修羅の道……」
「それでもあなたは戦場に立てると、その道を進むと言えるのか。そうまでして戦う理由があるのか、それが聞きたい」
「私は……」
　修羅の道、確かにそうだ。人間と人間が戦う、そうして生まれる憎しみと負の連鎖。
　ならば私はどうすればいいのか？　それはやはり、決まっているかもしれない。
　きっとお父さんは、その連鎖を断ち切る為に世界を飛び出したんだと思う、それはつまり、どういう事？
　その答えは出ないけど、戦う響さんを、そして人々を守るために必死な二課、そして一課の人達を、ここに来てから見てきたのだから。
　お父さんがどうだった、じゃなくて、私の答え。
　どうしてあの時、私はまだ戦えないのかと漏らしたのか。どうして響さんと並び立ちたいと思ったのか。

どうして、自分にできることを探したのか。
「私は……誰かを守るために戦っている人たちが思いや信念を持って、貫き通す為に戦っている事を知りました。きっとお父さんもそうだったんだと思います。そんな人たちに、守られていたんです。だから」
そう、だから、私が――
「だから私が、そんな人たちを守りたいと思いました。あの時みたいに見送るだけで、守られるだけで終わりたくない。響さんを、翼さんを、司令を、櫻井さんを、二課の人達も、一課の人達も！　それに……」
「あの少女も」
「そうです。きっとその少女にも信念があって、目的があって、事情があるはずです。ノイズを操って、完全聖遺物を身に纏って、そこまでしなきゃいけない理由があるはずなんです。だからお互いに傷つけあう事があっても、その命は、心は守りたい」
理由なき悪意があるだなんて思いたくはない、だからその理由を理解して、和解して、そしてその信念を守りたい。
傲慢なのがわかっている、だけど。
「私はきっと、戦うんじゃなくて、守りたいんです。傲慢かもしれません、翼さんの質問に答えられていないかもしれません。でもこれが、今の私が戦場に立とうとする理由なんです」
「その道は、きっとあなたが想像するよりも過酷で、挫折に満ちた道のはず。それでも？」
「それでもです！」
「そう。ならば強くなりなさい、守るという事はただ傷つけるよりも強くならなければいけない。相手すらも守りたいというのなら。私や立花、そしてあの少女よりも強くなる他ないわ」
「はい……いきなり全部守れると思うほど傲慢じゃありません、少しずつでも、強くなります！」
そしたら、きっと天国のお父さんも報われるよね……？
「あなたの覚悟は伝わったわ。私の事すらも守れるほど強くなる事、期待している」

「はい！」
　そうだ、私ができること、私がしたいこと、それをもっともっと多く、大きくする為に強くならなきゃ。
「……あ、そうだ、翼さんにこれ持ってきたんですよ。まあ二課の皆さんの分も買ったんですが、甘いもの食べて大丈夫ですよね？」
「ええ、まだ日が高い時間だし問題はないけれど」
「よかった、買ってすぐに来たからまだあったかいはずですよ！　緒川さんから好みまで聞いてきましたから美味しいうちにどうぞ」
「これは……御座候ね、好みという事は中身は」
「待ってください翼さん、今なんと言いました？」
「中身の話をしただけだと思うけれど」
「その前です」
「御座候、と呼んだだけじゃない」
「御座候……」
　聞きなれない呼び方でつい聞き返してしまった。
　そういえば大判焼きって呼び方がいっぱいあるんだ、思わず何か言ってしまうところだった。
　それにしても御座候、御座候。
　なんというか、似合ってるなぁ。
「そう見つめられると、食べにくいのだけれど」
「あ、ご、ごめんなさい」
　先ほどまでの語らいはどこへやら、すっかりと和んだ空気が辺りを包んでいた。
　後で二課の方でこれをどう呼ぶか聞いてみよう、そう思ったのだった。

手合わせ

フィーネ、終わりの名を持つ者。
それが今まで私たちを苦しめてきた元凶であり、敵の正体……らしい。
ネフシュタンの鎧を纏った少女――雪音クリスの襲撃。その一部始終を二課の本部で、私は見て、そして知った。
戦争の火種を消し、人類を呪いから解放する。それが彼女らの目的。
その為にノイズを操り、完全聖遺物を狙い、米国と協力して暗躍していた。
世界平和を願うのに、そこまでする必要があったのだろうか、戦争の火種を消す、その為に戦っていた父も。もしそのチャンスがあれば、そんな事を――。
そこまで考えたところで、私はネガティブな思考をかき消すように首を振った。
父はそうではなかった、そうはならなかった。自分が犠牲になろうとも、理不尽に力を振るう事はなかったのだから、この考えは今は終わりだ。
「深刻になるのはわかるけど、シンフォギアの装者は二人とも健在。それどころか、三人になるのよ？　頭を抱えるにはまだ早すぎるわよ」
「それってまさか……！」
「そのまさかよ、重音ちゃんのシンフォギア。パンドラの箱が完成したわ！　ちょ～っとだけ時間かかっちゃったけど、これであなたも戦えるわ」
そう言って赤い結晶がついたペンダントを差し出す了子さん。
原型無いなぁ、とかそういえばこれだけ長く手放してた事なかったな、とか余計な考えが頭に浮かぶ。
これを受け取れば、ノイズと戦う術が、誰かを守る為の力が、お父さんの無念を晴らせる可能性が、手に入る。

恐る恐ると言った具合でゆっくりと、差し出されたそれを手に取り。首にかける。
「ん～、加工前の聖遺物も似合ってたけど、そっちも似合ってるじゃない？」
「そ、そうですかね……」
似合っている、という言葉に少し照れながらも、心の中でパンドラの箱におかえり、と告げる。
「重音くん、この混乱した状況で戦いに身を投じるというのは酷かもしれないが……」
気を使ってくれているのか、司令はそう言葉をかけてくれる。
しかし私はもう覚悟を決めてしまっているのだ、翼さんに、ああやって言ったばかりだし。
一度ちらりと翼さんを見た後、司令に向き直る。
「大丈夫ですよ、ここでずっと二人の戦いは見てきましたし、それに、戦う覚悟はできています、だから……また未熟で、足を引っ張るかもしれませんけど。よろしくお願いします」
そう言って司令に、そして二課の皆にお辞儀をする。
そうだ、私だけの戦いではないのだから、きっと迷惑もかけるだろう。もしかしたら衝突することもあるかもしれない。
「だったら、一層頑張ってもらわないとな！　フィーネの目的が不明な以上、様々な可能性を考えなければならない」
「……はい！」
その後、翼さんが響さんの事を仲間と認めてくれたり、響さんとガングニールとの融合が進んで強大なエネルギーを生んでいることを了子さんが語ったりと、様々な事があり。
そして――
「大槻、少しいいだろうか」
響さんがリディアンの寮へと帰った後、翼さんに呼び止められた。
「は、はい！　なな、なんでしょう！」
「そう硬くならないで欲しいのだけれど……いや、つい先ほど正式に装者になったのだから、身が引き締まるのも無理はないか」

「す、すみません……」
「いや、大概が謝る事じゃない。それで、要件なのだが。明日もしよければ私のリハビリを手伝ってはくれないか」
「リハビリ……ですか」
「ああ、今はもう歩く事も歌う事も十分ではあるが、戦場に立つには少し無理がある、それ故に……明日、あなたへの稽古も兼ねて少しだけ」
「は、はい！　私でよければ！」

◆◆◆◆◆◆◆

昨日、翼さんからの申し出を承諾したことを、少しだけ後悔していた。何故なら……。
「え、ええと、どうしてこんなことになってるんですかね？」
「だから言ったじゃない、リハビリを兼ねてあなたに稽古をつけると」
リハビリだと言われて二課の方に案内された段階だと、医療施設もあるしそこで何かするのかと思っていたけれど。よくよく考えれば翼さんは昨日既に出撃していたのだ。
つまり、まあそんな大事を取ったリハビリよりは段階が先のものになるわけで、それはわかる。だけど……。
「稽古をつけてくださるのはありがたいんですけどなんでギアを纏ってるんですか!?」
「こちらが敵の存在を知った以上、相手がいつどんな手段で来てもいいように警戒しなければならないということよ。立花には一か月近く戦いに身を置いた時期があったけれど、あなたにはそれがない」
「つまり……今のうちにシンフォギアを纏う感覚に慣れておけ。という事ですか」
「そういう事だ」
なるほど確かに、何年も装者として戦って来た翼さんや先日アームドギアに代わる力の使い方を編み出した響さんと違って私は、パンドラの箱の力も、性能も知らないままだ。
アームドギアを使えなくても、少なくとも纏っている時の体の動か

し方は知っておかなければ、初めて出会ったあの日みたいに振り回されるだけだ。
「わかりました……私、歌います」
「その意気だ」
「ｒｏｌｅ　ｐａｎｄｏｒａ　ｐｙｘｉｓ　ｔｒｏｎ」
胸に浮かぶその歌を口にすると、あの時のように私の体は光に包み込まれる。
収束した光が粒子となり、シンフォギアへとカタチを変えていく。
白を基調としたインナースーツに、それを上から塗りつぶすように装着される機械的な鎧、これはあの時と同じ――いや。
アームパーツは前回よりその面積を増し、肘の辺りまでを包み込み、そして何より。
深い紫色だったそれは、黒に。少し恐ろしいほどの漆黒へと変わっていた。
「これが……シンフォギア……」
「うむ。とは言っても、あの時のものと見た目はそう変わっていないな」
「は、はい……ちょっと大きくなってますけど」
「恐らく櫻井女史が手を加えたことにより、以前よりも力を効率よくシンフォギアの形に出力できているのだろう」
「なるほど……やっぱり了子さんって凄いんですね」
などと少しだけ言葉を交わした後、お互いに息を吐き、そして呼吸を整え構える。
ああ、なんというかこういうの司令と見た映画でもあったな……。
「じゃあ、あなたと私、手合わせしましょうか」
「お、お手柔らかにお願いします……」

◆◆◆◆◆◆◆

痛い、とても体が痛い。
まだアームドギアを使えない自分の為に、翼さんもアームドギア無

しでの組手をしてくれたのだが、それはまあ見事に転がされてしまった。
途中で投げ技に少しは対応できるようになったけど、まさか逆羅刹とは……。
「大丈夫？」
大の字になって倒れている私に翼さんが心配そうに手を差し伸べてくる。
「ありがとうございます……」
「ごめんなさい、誰かと手合わせするなんて久しぶりだからつい、熱が入ってしまって」
「いえ、そんな。私がまだまだ未熟だったからで」
そうやって話して気が抜けたからか、変身は解け、元の姿に戻ってしまう。
気が抜けたら戻るの、よくないなぁ……ちゃんと制御できるようにならないと。
「今日は、これで終わりね」
「そう……ですね」
なんというか、翼さんはギアを纏ったままな訳で、私だけ勝手に気が抜けてしまったのが、少し気まずい。
「……あ、あー！　そうだ！　私リハビリ終わった後に一緒に飲もうと思って黒豆茶持ってきたんですよ！　用意しますね！」
一人で勝手に気まずくなっているのはわかっていながらも、ついそうやってトレーニングルームから飛び出してしまっていた。
さっきまで体に走っていた痛みなど気にせずに……否。
まるで、手合わせで受けた痛みが、どこかに行ってしまったかのように……。
それに私は、気づけずに居たのだ。